

教練と歴史教育

清 田 善 樹

교련과 역사교육

국민의 역사의식이 형성될 때 역사교육이 가지고 있는 영향력은 크다. 특히 학교 국사교육에서 가르치고 있는 역사지식은 한국인들의 역사의식을 기정한다고 할 수 있다. 그러나 국사이외의 교과중에서도 역사적인 사항에 언급될 경우가 많이 있는 것은 명백하다. 나는 이 논문을 통해서 교련교과서에 있어서 역사적인 문제가 어떻게 기술되고 있는가 그리고 교련에서는 역사를 이용할 목적이 무엇인가란 문제에 대해서 생각한다.

먼저 결론을하면 사실(史實)과 이야기를 엄하게 구별할 필요가 있는데, 교련교과서에서는 양자를 공동해 버렸다고 해야한다. 또, 민족이란 개념에 대해서도 역사학 연구에 의거하지 않고, 조역사적인 의론과 논리적인비약을 볼 수 있다.

나라를 사랑하고 나라를 수호하는 것은 국민의 신성한 의무이다. 그렇다면 역사적인 사실을 바탕으로 역사연구의 성과에 의거한 교육을 할 필요가 있다고 생각한다.

key word

militatary drill, history, education, national defence

は じ め に

私は以前、韓国の中学校で使用されている国史科教科書の中に、日本の歴史がどのように記述されているかという観点から、韓国の中学校用国史科教科書の記述を検討したことがある(注1)。その際、記述がより詳しいと思われる高等学校用の教科書によらなかったのは、当時、韓国の学校制度では、中学校も未だ義務教育化されておらず、そのような状況下では、高等学校用の教科書よりも中学校用の教科書の方が国民の歴史意識形成に与える影響がより大きいと判断したからであった。中学校用の国史科教科書を検討してみた結果、古代史では半島の日本に対する文化的優位性から来る記述態度が目につき、中世以降では日本による侵略の歴史が詳しく紹介されているが、日本で一般に予想されているほどには反日的記述は見当たらないことが明らかになった。もっとも、反日的云々は教科書を見る人の主観に左右される部分が大きく、特に近代における日本の朝鮮侵略の歴史が詳しく述べられているのを見

れば、そのことをもって反日的と見る人もいるであろう。

反日的であれ親日的であれ、韓国人がどのような考え方をしようとも、その態度決定に際しては、政治的や経済的な条件によっている場合もあるだろうが、歴史教育の場で形成された日本観も大きく関係するであろう。ところで、教育の場で歴史に対する一定の見方が形づけられるとすれば、それは歴史教育の場においてだけであろうか。教科の一つとしての国史科は歴史教育の一部であり、教育的な配慮が強くなされる。教育的見地が優先されるとはいつても、歴史学研究の基本的な方法や態度を無視することはできず、その限りにおいて歴史的事実すなわち史実を重視する。しかし、歴史学研究の掣肘を離れたところで歴史が物語られるとき、史実であるか否かはあまり、あるいは全く問題にされないこともありうる。

日本史について言えば、たとえば、落語「子はかすがい」の中で、離縁した妻について行ったわが子を思いだし、あの子に喰わしてやりたいものだと言った熊さんを見て涙ぐむ熊さんを「あのおじちゃん、清正公様みたいだ」と他の子供が言う場面がある。加藤清正と毒饅頭の話しをはじめとして、加藤清正の虎退治、ウルサン籠城の物語、豊臣秀頼と徳川家康の会見後懷から短刀を取り出した話し、これらの物語はどれも教科書には載っていないし、学校で教えることもまずないだろう。これらの物語を身近に聞いて育った世代の人たちは、一定の加藤清正像をそれぞれの胸中に形づくっていたのではないかと考えられる。しかし、それらの清正像は、学者が史料に基づいて描く、いわゆる史実とは大きく異なっているかも知れないのである。にもかかわらず、講談、落語、浪曲などが描く人物像の方が一般には受け入れられやすいし、また話の内容もおもしろく共感をもてるものが多いのである。そこで、学校教育にもう一度立ち返って、歴史以外の教科で歴史意識形成に関わる科目はないものかと考えながらソウル市内の書店の教科書売場を見ていたところ、高等学校用の教員の教科書が目に入った。手にとって見てみると、わずかではあるが歴史に触れた部分があり、歴史に関係する記述は、愛国心、国土守護などの精神涵養に関わるらしく思われたが、日本との関係に触れた部分もある上に、日本との関係が上記の精神涵養に深く関わっているように思われたのである。

教員という科目のねらいの一つに、国土防衛意識の涵養や愛国心の養成があるのは想像に難くないが、そうであるならば、歴史的な事柄についてもより明確な立場から教育に利用するであろう。それでは、教員という特殊な教科の中で歴史がどのように取り上げられているか、歴史を使って何をどのように訴えようとしているのか、以下に見ていくことにしよう(注2)。

一 教員科教科書

小論で取り上げる教員の教科書は、韓国教育開発院編纂、1997年3月1日発行の『高等学校 教員』である(注3)。版型はB5版で、表紙は上三分の一が薄いクリーム色、下三分の二に韓国の国旗である太極旗を掲げた人々のレリーフが薄い灰色で印刷されている。表紙を

開くと見開きで、白頭山頂上にある湖、天池の写真がごく薄い緑色のモノトーンで印刷してあるのは、以前の国史の教科書と同じ意匠である。口絵はカラー4ページで、最初に忠清南道天安にある独立記念館に展示されている「3・1精神像」と題する群像彫刻が1ページ大で印刷されているのがまず目に付く。他の3ページには、「119救急隊の応急処置の模範実技」「楽しい我々の農楽」「災害救助活動」「地下鉄工事の場でのガス爆発現場」「わが国におけるもっとも古い太極旗」「国際会議連盟第70次総会」の写真がそれぞれ半ページ大で並ぶ。教科書本文に用いられている活字の大きさはほとんど一種類であり、挿図や写真は結構多いように思われるがすべて単色である。

目次の前に1ページ半の序文が書かれている。序文は、男子用の教科書に比べると倍以上に長くなっている。男子用の初版が刊行されたのが1990年、小論で取り上げた教科書の初版発刊が1996年であることを考えると、この間の国際情勢や経済発展にともなう韓国の国際社会における地位の向上などの諸条件によって、教練教育の目的に何らかの変化あったかとも考えられるが、両教科書の基調に大きな変化があるようには見受けられない。教練科の教育目的が変化したのではなくて、教育の姿勢が変化したのであろう。

序文によれば、教練教育の目的とその内容は、1948年の学生軍事教育を実施して以来、国内外の諸条件によって変化発展してきたが、その間一貫して安全な生活と健全な国民意識の涵養など、生活の質的な側面に焦点が当てられてきたという。そして第6次教育課程(注4)において教練教育の目的は、国防と安全保障の当為性の認識、自己と災難から生命と財産を守る能力と生活の礼節を理解して実践しうる能力を養い、健康な国民生活に必要な保険知識と技能の習得、日常生活に必要な基本的看護の知識と能力の養成の5点にあるとしている。序文による限りでは、教練教育の目標は多岐にわたっており、またきわめて実践的なものであるらしいことが感じ取れる。

次に、目次から各章の見出しだけを紹介する。

- I. 国家安保とわが国の姿勢
- II. 周辺情勢とわが国の安保
- III. 国難克服と護国精神
- IV. 秩序生活
- V. 事故と災難
- VI. 応急処置
- VII. 衛生および看護

I 章は、

- 「国家安保の概念」
- 「国家安保の重要性」
- 「国家安保の脅威」

「戦争の原因と予防」

Ⅱ章は、

「冷厳な国際関係」

「強大国の韓半島政策」

「韓半島の実状」

「我々の安保外交」

といった節が設けられている。このあたりは我々の「教練」のイメージに合うが、Ⅳ章以下の内容はわが国の学校では、保健体育や道德教育、さらには家庭科の内容に一部似かよっているようである。男子用教科書では、地図の座標、高度や起伏、方位角の読みとり方、さらに野営や登山の仕方まで教えている。一見するとリクエーションまで扱っているように見えるが、もちろん遊びの要素はまったくない。すべて教練の教育目標に収斂するようにつくられていて、狭く軍事に限定しないで広義の意味での国家安全保障に寄与するように構成されているのである。

第1章の章目次には、再び天池のモノクロ写真が印刷されている。天池は国史科の教科書で「わが民族の精神の宿るところ」と説明されている韓（朝鮮）民族の聖地である。したがって、教練教育に当たり、民族精神の高揚が重視されていることがここからも伺えるのである。

第2節の「国家安保の重要性」では、最初に公園の芝生の上を楽しそうに駆けている小さな子供たちの半ページ大の写真が掲載されている。反共主義を正面にたてず、また朝鮮戦争の際の北朝鮮軍による一般民衆への「残虐行為」を強調したりせずに、現在の平和な状態、子供たちが何の心配もなく楽しく遊べる状態をこそ守らなければならないのだという論法のようなのである。教練というとすぐに軍事教練という言葉が連想され、学校教練ももっと軍事を強調するものかと思っていたが、予想外にソフトな教科書の作り方だと感じた(注5)。

しかし、「国家安保」「対内安保と威嚇」「対外安保と威嚇」「軍事力維持と威嚇」(注6)といった言葉は、わが国の教科書ではまず見ることはないものであろう。最近、国の防衛や海外派兵について、それについて賛成であれ反対であれ情緒的な発言を目にすることがあるが、国とは何か、なぜ国を守らなければならないのか、国を守るにはいかなる方策があるのかといった点について、歴史や国際情勢をふまえた議論をする訓練を、わが国の教育の場でもおこなう必要があるように感じた。日本人なら国を愛するのは議論の余地のない当然のことであるとか、国に命を捧げることは崇高な国民の義務であるといった結論を前提にした教育は有害かつ無意味であろう。

二 教練科における歴史教育

教練の中で歴史に関わるのは、第3章「国難克服と護国精神」である。この章は、次の四

つの節から成り立っている。

1. 護国精神の源流
2. 民族の国難克服史
3. 日帝の侵略と独立運動
4. 6・25戦争の教訓

第4節の「6・25戦争」とは、いわゆる朝鮮戦争のことであるが、韓国では戦争が始まった日付によってこのように呼んでいる。2・3節において、具体的な侵略や戦争の史実を元にして、祖先がいかにして外部からの侵略に対して抗戦したのか、国を守ることがいかに大変なことであったのか、といったことがらについて解説をおこなうとともに、歴史的な観点から教練科の目標を達成しようと意図している。この部分では、豊臣秀吉による朝鮮侵略や日本による植民地支配の問題を取り扱っており、韓国民の日本に対する意識形成にもある程度関わっていると思われる。

以下、第Ⅲ章の第一節において、韓民族の歴史がどのように記述されているかについてみていくことにする(注7)。

第Ⅲ章において扱われる歴史は、教練教育の目標に則ったものであるから、史実を基本にして考えていくというよりは、むしろ神話や伝説を積極的に活用していこうとする姿勢が強く感じられる。第一節においても檀君神話を元にして、韓国人がいかに護国精神にあふれた民族であったかを強調している。

本節において学ぶべきことがらは、有史以来たびたび外部からの侵略にあいながらもこれをその都度克服してきた祖先の護国の意志と抵抗の精神、犠牲的精神、共同精神および知恵と創意の力を学ぶとともに、6・25戦争の教訓を理解して、いかなる試練も克服しうるのであるという姿勢と決意を持たせることであるとされている。

この教科書において歴史を学ぶ理由は、以上のように、護国精神(愛国心にとどまらず国防意識を強調してこのように言っているらしい)を学ばせ、護国のために献身する決意を持たせることにあるのであるから、きわめて精神主義的なアプローチをとることになるのは当初から予測できるところである。実際、最初に学ぶことがらは、韓国における神話時代というべき「古朝鮮時代」から記述が始められる。

古朝鮮は、「B.C108年の漢四郡設置までに主に韓半島西北海岸地域にあった部族国家、いわゆる檀君朝鮮・箕子朝鮮・衛満朝鮮の総称」であるが、「未だ確実な傍証はなく、新たな科学研究と解釈が必要である」(注8)という。神話によると古朝鮮の建国は、天帝の息子である桓雄が風・雨・雲をつかさどる神々を率いて白頭山(太白山)の神檀樹の下に天降って建てた神市という国に始まる。そして桓雄の子檀君が紀元前2333年に檀君朝鮮を建国したという。「桓雄の神市」の段落では、あたかも史実であるかのように桓雄の天降りと神市について説明をしている。

続く「檀君朝鮮と国中大会」の段では、檀君朝鮮の版図などについて述べるが、注目されるのは「国中大会」についてである。

檀君朝鮮が残した貴重な遺習は国中大会であった。国中大会は運動競技でありながら武術大会であった。祭天行事が終わった後に競技を始めるのであるが、その種目はきわめて多様であったという。

として、今日の水球・テコンドー・乗馬競技・弓術・ポロ・石戦などに相当する競技や相撲・綱引きなどをおこなったという。これらは後代、韓国人の伝統的競技や遊びになったが、実は一種の軍事訓練でもあったのだと述べている。

各競技の説明は、おおむね簡単に競技内容を解説するにすぎないが、弓術競技をおこなったと述べたところでは、「昔、わが国の若者たちは読書習射といって、文武兼備の教育を受け、村ごとに弓場をつくって弓射を錬磨した」というように、文武両道の伝統を強調するところもある。弓術について特に文武兼備の伝統に触れられているのは、次に述べるように、中国の史書に古代の朝鮮人はみな弓術に長けていたと書かれていることを根拠としている。

この段落では、韓民族の祖先が武術錬磨を生活の中に取り入れて日常化してしまっていたことと尚武精神を養ってきたことが、数多くの国難を経験しながらも、単一民族の脈を守り続けてきた原動力になったと結論づけている。「国中大会」について、手元にある韓国で出版された小さな国史事典を引いてみたが、そのような項目はなかった。高等学校用の国史教科書をみても、国中大会に関する記述は見当たらず、これは教員の教科書独自の記事らしい。

国史教科書における古朝鮮と檀君の取り扱い方についてみると、こちらでは旧石器文化・新石器文化・青銅器・鉄器時代というように、考古学的な見地からの説明から始まっている。そして「古朝鮮の建国」として檀君の古朝鮮について解説する。青銅器文化の発展とともに君長が支配する社会が出現し、それに連れて大きな力を持つ君長が現れ周辺社会を統合していったとして、古朝鮮の建国に歴史的な位置づけを与えている。決して神話をそのまま史実であるかのようにには取り扱っていない。ただし、欄外の注において、

檀君の建国に関する記録は『三国遺事』、『帝王韻記』（中略）などに現れている。天神の息子が天降ってきて建国したという檀君建国の記録は、わが国の建国過程の歴史的事実と、弘益人間の建国理念を明らかにしてくれ、高麗、朝鮮、近代を経てわが民族の伝統と文化の精神的支柱になってきた（注9）

と書かれており、いったいどの部分が「歴史的事実」なのか不明である。国史の教科書は歴史学的な記述を基調としてはいるが、そのような教科書においても神話と史実との境界が曖昧なのである。檀君神話は、各時代を通して「民族の伝統と文化の精神的支柱」であったという位置づけがこのように記述させることになったのであろう。国史の教科書はそれでも「わが国の建国過程の歴史的事実と、弘益人間の建国理念を明らかにしてくれ」として、檀

君の建国神話すべてが歴史的事実であるとまでは言うてはいないようであるが、教練の教科書では、尚武精神を強く訴える必要上から、史実か否かの詮索を全くおこなわないのであると考えられる。

教練教科書の上記のような記述の仕方は、歴史学の立場からは好ましいものとはとうてい言えない。しかしながら、民族精神の支柱としての位置づけを与えられた檀君神話のこのような扱いは、護国精神の涵養のみならず、自国の歴史理解に対しても相当強い影響力を持つのではないだろうか。国史科では、檀君の建国は一応国家史の中に位置づけられた上で記述されているが、それだけに理屈っぽく感じられるかもしれない。教練教科書のような記述の仕方の方が（こちらも教訓臭さが鼻につきはするが）、感性的に受け入れやすいように思われる。また、国史科では、歴史そのものを学ぶことが目的になっているが、教練においては学ぶべきことがらは歴史そのものではなく、歴史は教練教育のための手段の一つにすぎない。その分、ある意味では気楽に学べるわけで、通俗的要素が国史科に比して多いこととも相まって、記憶にとどまりやすいといえよう。

なお、二十数年前まで韓国では、公文書に檀紀（檀君が国を建てた紀元前2333を紀元元年とする）を使用していた。また檀君信仰は19世紀の民族主義の高揚とともに大宗教として民族宗教になり、今なお有力な韓国の固有宗教である。そのような事情を考えると、神話と歴史の混同を一概に非難するわけにはいかないと言う気もする。

上記の段落では、古朝鮮人の尚武の気風について述べていたが、古朝鮮が存在した地域には様々な民族が居住していた。それらの民族は中国からは東夷と呼ばれていたのであるが、それらの民族も現韓民族の源流を構成するものと韓国では考えられているので、次の二つの段落においては、「夫余人の気性」「沃沮、濊貊、三韓の鬪魂」について述べられることになる。

この段落において強調されていることがらは、前の段落と同じく尚武の気風である。まず、夫余についてみる。

夫余は檀君朝鮮を継承した国であるとされ、檀君朝鮮の軍事制度と気風を受け継いでいるとされる。軍事的な面については、中国の『三国志』の魏書東夷伝の「夫余人は、弓と槍、刀を武器とし、家ごとに鎧と武器を準備している」という記事を引用しつつ、「これは、すべての成人男子が平素も有事に備え、常に武装をしていた」ことであると解説をしている。そうして、「戦争が起こればすべての国民が軍事にかかわる、あるいはあらかじめ準備された兵力をもって戦争に加わるのであり、戦争が勃発すれば誰もが戦場に出ていったということを知ることができる。外敵が侵入すれば、皆が戦闘に参加するという原則は一種の民兵制度である」と述べて、国民すべてが有事に際し武器を取って駆けつけることが韓民族の古くからの伝統であるとする。周知のごとく、韓国は今なお北朝鮮と戦争状態にある。休戦ラインを挟んで小競り合いがしばしば発生するのみならず、東の海岸地方では潜水艦の侵入事件

も相次いでいる。日常的に一触即発の危機に直面している韓国では、国民皆兵が必須である。したがって、教練においては、国民皆兵あるいは民兵制度が韓国の古い歴史に根拠を持つ伝統的制度であることをことさらに強調しているわけである。

沃土や濊貊、三韓の諸民族についても、それらについて語る視点はもっぱら軍事的な面からに絞られている。これらについても前項同様に中国の史書に依拠しつつ、戦争に際して彼らがいかに勇敢であったかが詳しく述べられている。ここでは以上に加えて、優秀な武器を作り出し、さらにそれらを改良して驚くべき性能をもたせたことにも触れられ、韓民族が本来的には創造的な精神の持ち主であり、戦いを恐れない雄々しくて勇敢な民族であったとして、次のように結論づけている。

韓民族の精神は、伝統と文化、生活様式の高質性と結束を通して、一つに団結できる民族愛を生み出した。このような民族と民族文化を守り発展させる精神が数多くの外部からの侵略を克服して民族文化を継承発展させ、世界中に民族の気質を広く鳴り響かせる原動力となった。

以上のようにして韓民族の護国精神発揮の歴史が明らかにされたわけである。次の項では、韓民族の道徳面から見た歴史が明らかにされようとする。すなわち、古朝鮮時代における「弘益人間」と「五訓」、三国時代の新羅の花郎道の「五戒」、朝鮮時代の「五事」である。

これらはいずれも儒教的な徳目であった。

例えば五訓は、

「誠実で偽りが無い」(誠信不偽)、

「勤勉で怠惰が無い」(敬勤不怠)、

「両親に孝行を尽し背いてはならない」(廉義不淫)、

「互いに和合して争ってはならない」(謙和不闘)

といった五項目からなる。韓民族の歴史の始まりを古朝鮮に求めようとする立場に立つ本教科書では、韓民族の道徳的規範の淵源も同じく古朝鮮に求めているらしい。現代の韓国人が人と議論をするとき、情緒的な発言よりは正義名分を先に立てることを好むことはよく知られているが(注10)、そしてそのような性質は儒教を国教とした朝鮮時代に起因すると思われるのであるが、この教科書を読むと、実は古朝鮮時代に現代韓国人の国民性が形造られてしまっていたのだという気になってくるのである。本単元では、そのような民族性は、古朝鮮時代以来の民族性であると説かれているのである。五訓については、次のようにまとめられている。

上の五箇条の徳目の中で最も大切なことがらは正義感であり、わが民族において正義は命と同様のものであった。わが民族は、何事に突き当たろうとも、有利・不利を計算する前に、正と誤をまず考えた。(中略)我々は名分を大切に思い、「名分はすなわち正義なり」と信じて、すべて利害関係を計算する前に義を最後まで死守することがわが民

族の品性であったのである。(中略)今日のわが民族の自尊心と志操も、まさにここに根拠があるのである。

中略をした部分では、このような正義と名分を重んじる態度は、朝鮮時代の儒学者の間で生じたものであるが、その起源をさかのぼれば高句麗時代のソンビ(学者)、新羅時代の花郎道の精神に始まるものであって、それはさらにさかのぼって古朝鮮に根元があるという意味のことがらが述べられているのである。今検討をしている記事が掲載されている教科書は教練の教科書であって、歴史の教科書ではない。が、それにしても、思想を成り立たせた歴史的条件や思想の担い手が当該社会でどのような位置にあったのかなどについて全く考慮しないで、まさに超歴史的に民族性を云々することには、正直に言って、強い違和感を覚えざるを得ない。また、教練に限らず国史の教科書においてもしばしば「わが民族」という言葉が使用されているのであるが、これももう少し厳密に使う必要があるのではなかろうか。民族というものは、現存する民族が太古の昔から今と寸分変わらない形で存在したのではなく、現存する民族は長い歴史の過程を経て形成されてきたものであるはずである。今ある韓民族の歴史を無視するかのような記述態度には、歴史学の立場からは危うさを感じるのである。韓国の古い小学校用の歴史教科書では、檀君神話が史実であるかのように記述されていたが(注11)、戦前の日本における国史教育を想起させるところがある。

三国時代の「五戒」は次の五項目である。「事君以忠」「事親以孝」「交友以信」「臨戦無退」。五訓と比べると、君臣・親子・朋友関係に加えて、「臨戦無退」が付け加えられていることに注目される。花郎とは元来、「新羅時代に、青少年によって組織された民間の修養団体。一名、国仙徒・風月徒・源花徒・風流徒」といったもので、「心身を鍛練して教養を積み、社会生活の規範を教え、必要な場合には戦闘員にも成ることができる社会の中心人物を養成」(注12)する目的をもっていた。花郎は、韓国においては、理想的な青少年教育の組織であったと位置づけられており、特に精神修養と有事の際には武器を取って戦場に駆けつける点は教練教育の目的にふさわしいものとされることは理解できる。したがって、「韓国が韓国らしくなるようにしてきたものは(中略)花郎だ」「花郎の歴史を知らずして韓国史を語るとは、骨を抜いておいてその人に精神を求めようとするような愚かなことだ」というある学者の発言が引かれていたりもするのである。

また、本教科書における花郎に対する評価は他の何よりも高く、五訓や五事に比べて倍以上の字数を費やして民族史上に花郎道がもつ意義を解説している。たとえば、花郎道精神は高句麗のソンビとともに韓民族が強大国として当時中国からも認識されることになった原因であるとしたり、女真族やモンゴルなどの異民族の侵略に対してねばり強く抵抗したこと、特にモンゴルに対して長期抗戦を展開した三別抄の護国精神は民族史上最も輝かしいものであると最大限に賞賛をしている。

この項の最後では、朝鮮時代の宋奎斌が、壬辰倭乱(豊臣秀吉の朝鮮出兵を韓国ではこの

ように呼ぶ)や丙子胡乱で屈辱的な敗北を喫してもなお国防を疎かにして党争に明け暮れていた為政者を批判した言葉を引いて、「有備無患」の考えを強調している。日本で言えば近世初頭に当たる時期に、朝鮮は日本と清国から侵略を受け、筆舌に尽くしがたい被害を受けた。日本の侵略を受けて国王は都から落ちのびざるをえない状況に追い込まれ、国土の大半は日本軍に蹂躪されたし、丙子胡乱の際には国王は地にひざまずいて降伏を誓わされた。いずれの場合も、国の体面は著しく損なわれた。三国時代の高句麗は隋や唐の度重なる侵略軍を退け、花郎道精神をもっていた新羅人は三国統一の源動力になった。古代朝鮮においては、大国中国をはじめとする外部勢力の侵攻撃退に成功したという輝かしい歴史を誇ることができたが、近代に近づくにつれて屈辱の歴史が増えるということになるのである。従って、普段から防備に努めて有事に備えることの重要性が「有備無患」の言葉に込められているように思われるのである。

宋奎斌の言葉の引用は大変長いものであるが、次のようである。

およそ、今日の我々の現実、都と地方とを限らず、皆が無事安逸に陥っている。軍士たちは、一つの武芸に熟達しておかなければならないのに練習しないで、弓と銃も名のみあるだけで錆が生じて撃つことができぬ。また、将校たちが軍士を召集して訓練する時を見ると、農民達を寄せ集めて員数だけ合わせておくため、秩序が乱れて市場の如く騒々しいだけである。ああ！国家の最大事は国防であるのに、その日その日歳月のみを送り、百年の間に累積された過ちをそのままにして正さぬとは。

国も、文と武をともに磨き、万全を期さねばならぬ。文によって国の内を治め、武によって外敵を防がねばならぬのだ。有備無患という言葉があるではないか。万一、中国で兵乱が起こり、釜山に倭寇が侵略してくれば、いかにしてこれらに対抗して国を守れようか。ああ！危険かつ危険だ。

以上のような宋奎斌の言葉を引用した後に、この項は次の言葉で結んでいる。

このように、わが民族には国難に対備し国防を強化して、国土守護精神を確固たるものにするという努力があった。

この後には、朝鮮時代の五事として観察使や郡守などの地方官が努むべき五項目が掲げられているが、朝鮮時代に清廉潔白な官吏が輩出したのもつまるところ新羅の花郎精神に淵源があったというのみで、付け足しの感は否めない。言うべき事は前項に尽きたと言うことであらう(注13)。

第Ⅲ章第一節の学習目標としては次の4項が設けられている。

1. 古朝鮮時代の神市について知る。
2. 国中大会の意味を理解する。
3. 夫余、沃沮、濊貊、三韓の護国精神を学ぶ。
4. 五訓、五戒、五事等を通して弘益人間の精神を学ぶ。

そして、この節の学習問題は二題設けてある。

1. 弘益人間精神を継承してきた事例を探してみよう。
2. 遺跡地巡礼や資料収集などを通じて、わが国の護国精神の源流を尋ねてみよう。

三 教練における「歴史」の問題点

前章で見てきた如く、教練とは畢竟国防意識の涵養と国防に必要な諸知識を会得することをもって第一の目的としている。歴史もそれに資するものという位置づけを与えられているわけである。前述した如く、史実の確定云々は歴史学に任せてと言うよりは、史実を無視するわけではないにしても、国防意識を持たせ、愛国心・愛民族心を生徒にもたせることに利用できるものならば、神話伝説のたぐいもすべて利用するという姿勢の方が顕著に認められる。さらに言えば、歴史から何らかの教訓を得ようとする姿勢もまた顕著であるということができる。実際、この教科書の第Ⅰ章の第三節、「国家安保の遂行と威嚇」の中には、「歴史の教訓」という一項が設けられているのである。

歴史叙述発展の三段階説の中に「教訓的歴史」があるが(注14)、教練の教科書はまさにこの「教訓的歴史」を最大限に活用したものといえよう。護国精神や愛国心、闘争心を生徒の心に注入しようとするとき、「韓国民ならば韓国を愛することは当然であり、国の危機に際して国に身命を捧げることは韓国民として当然の義務である」と教えるわけであるが、この時に、韓民族は太古の昔から常に武芸を磨き、新兵器を発明し、外敵の進入に対してはどれほど敵が強大であっても勇敢にこれを撃退したのだという韓民族の「護国の実績」を基に教育するならば、その教育的効果はさらに増すであろう。男子用教科書の方では、歴史に関わる記述は比較的少なく、古朝鮮時代の五訓への言及はない。民族精神を物語る具体的な事例も、「高句麗人の闘魂」「新羅人の愛国心」という項目のもとでそれぞれ一ページが当てられているだけである。両方の教科書に共通していることは、強大な中国と対等に戦い、時には大きな打撃を与えて撃退さえしたことある強国高句麗、最初に半島を統一した新羅、この二国に対して高い評価を与えていることであるがそれは当然といえる。それ故にその評価の仕方はもっぱら軍事的側面と精神主義的側面に限られている。

結論は最初から予測されたところではあるが、教練という教科の性格から、国防意識や愛国心、奉仕の精神などを教育するために、歴史の利用しうる部分だけが利用されたと言うことである。ただ、男子用教科書と比較したとき気づいたことは、男子用が明確に北朝鮮に対して軍備を整えておかねばならないこと、北朝鮮の侵略的性格を十分に警戒しなければならないことをくどいほどに強調していることである。また、北朝鮮の実状を「封建王朝」と規定したりするなど、対北朝鮮意識と反共主義がきわめて顕著に認められる。これに対して、1997年版の男女共用教科書は、北朝鮮観や共産主義に対する姿勢に基本的な変化はないものの、若干調子は穏やかになっているように思われる。ソ連の崩壊や冷戦の終結といった国

際環境の変化が、教科書にも影響しているのであろう。

今回取り上げた部分は、具体的な歴史的事件を取り扱ったものではなかった。歴史のおもしろさという点では、正直言って、さして興味深いものとはいえない。韓民族の優秀さ、勇敢さが種々述べられてはいたけれども、血沸き肉踊るようなエピソードは全くなかった。したがって、歴史的な知識が、生徒の心に印象深く刻み込まれるというようなことは、この部分に関しては、考えられないであろう。しかし、多少なりとも歴史学に関わるものを含んでいるのであるから、歴史学の立場からこれを見ると、やはり問題点があるのではなかろうか。「護国精神」と呼ばれている国防意識については、ここでは云々しない。国史科の教科書でも多用されている「わが民族」について少し考えてみたい。

教練の教科書では、古代東アジアに存在した夫余・沃沮・濊貊・高句麗・新羅・百済などをすべて等しく「わが民族」＝韓民族として扱っている。濊貊は穢貊とも記し、広義では夫余・高句麗・沃沮などの諸族を構成した主力であり、後に百済が起こった際には彼らが百済の支配層をとったと考えられている。狭義では、江原道から咸鏡道南部に居住した、ツングース系の言語に若干モンゴル系を混合した言語を使用し、狩猟、漁労、牧畜を主とし農耕もおこなった民族を指すという(注15)。夫余・沃沮なども言語系統など不明な点もあり、建国神話などにはこれらの民族にある程度共通したものも見られると言うことであるが、現在の韓民族と全く同じ民族であったとは言い難いようである。むしろ、これらの民族が長い歴史の中で次第に現在の韓民族を形成していったと考えるべきであろう。それゆえ、民族性について云々するときにも、無批判に過去の事象の継承を持ち出すべきではないと考える。新羅の花郎道は新羅という国家の中で生み出されたものである。それと高句麗のソンビとを同じものとしてしまって、朝鮮時代の清廉潔白な官吏(清白吏以)がもっていなければならない徳目「忠道有才徳」は、新羅の花郎精神や高句麗のソンビに根をもつ、と言い切ってしまうことには不安を感じるのである。ましてや古朝鮮時代の五訓にまで直結させることは論外である。

私は、教練という教科について全く無知である。どのような教育方法が取られているのかも知らない。ただ、この教科書から受ける印象では、民族性や国防意識に関する歴史的な記述は、おそらく記憶することに主眼がおかれているのだらうと思うのである。神話、古代史、中世史、近世史と長い時間的隔たりをもつ各時代のことがらを、それぞれがもつ歴史的条件を考慮しないで、都合の良い部分だけを切り取ってきて恣意的に直結させることは、歴史学では絶対にとってはない方法である。私は、韓民族が創意と工夫に満ちた、そして護国精神にあふれる民族であったこと、外敵に勇敢にねばり強く抗戦したことなどを否定するつもりは毛頭ない。しかし、事実の吟味をしないで、歴史学の基本を無視したやり方で導き出された結論やその説明にどれ程の価値があるのか大いに疑問である。このような、物事を飛躍させるような思考方法が、歴史学に何らかの影響を与えることを恐れるのである。

歴史の教科以外の教科が歴史意識の形成に何らかの影響を持つのではないかというのは、実はこのようなことを言いたかったのである。

終 わ り に

これまで私が話したことのあるごく少数の韓国人は、私と同年齢か少し若い人たちに限られている。彼らは現行の教科書ではなくてもっと古い版の教科書で歴史を学んだはずである。そして私と話したときには、彼らは皆既に兵役を終えていた。彼らの身分は国家公務員であり、文化財行政に関わる人たちであったので、歴史に対する知識は相対的に豊富であったと思われる。彼らは、宮殿や抗日闘争をした人々に関係する遺跡や施設を案内してくれたのであるが、私に面と向かって「日帝時代」のことを非難することはなかった。もちろん、日本からやってきた「客人」に対して失礼なことを言うはずのないことは当然である。しかし、非難はしないものの、「いや、私たちも悪かったのです。国の力が弱くて日本に対抗できなかったのですから。私たちの力が強かったら、あんなことにはならなかったでしょうし、逆に私たちが日本を支配していたでしょう。」という意味の言葉を何度か聞いた。この言葉の中から日本に対する復讐心を見いだすことができるのかもしれないが、それよりも彼らは相当冷静に、且つ客観的に自分たちの歴史を見ているのだなあと言う感想を私はもった。少なくとも、何か問題が起きるたびにマスコミに現れる論調とは、相当様相が異なっているように思えたのである。韓国の近代史の見方であるが、一方的に被害者意識を前面に打ち出すことをしないで、自分たちの弱点や欠点を冷静に認識しようとしている。天安にある独立記念館の展示内容に、日本の残虐行為を等身大の人形でみせるきわめて反日的なものがあるとよくいわれる。確かに、あのような展示を子供に見せなければならないのか疑問がないわけではないし、また日本がおこなった残虐行為が、実際にあったことなのか怪しいと思う日本人がいらないわけではない。けれども、展示の全体を見渡すと、決して反日教育をおこなうことのためだけを目的としてつくられたものではないことはすぐにわかる。私が独立記念館の展示を見て思ったことは、この展示を見学した子供達あるいは大人達は、どのような歴史意識をもつようになるのだろうかと言うことであった。国史教科書の内容と、展示が訴えていることとの間には、差異はないようであったが、視覚に訴える部分が多いだけ、歴史を感覚的に理解してしまうのではないかという、どこの博物館でももつ印象を、ここでも持ったのであった。

韓国の高校で歴史の教師をしている人であったことがある。その人に、是非一度高校での国史の授業を見学させてほしいと頼んでみたことがあった。その人の返事は、「やめた方がいいですよ。あなたが期待するようなことは何ともありませんよ。大学の入試に合格するためにただひたすら歴史の事項を説明し暗記するだけです。退屈なだけですよ。」というものであった。とすれば、生徒の歴史意識を形作る上で、国史科の授業はあまり関係しないのかと

思った次第である。翻って日本における歴教育のありかたを見てみると、事情は韓国とそんなに変わらないように思えるのである。歴史の教科書の記述が国際問題にまでなることがあるが、歴史の授業は生徒の歴史認識に対して、それほど大きな影響力はないのかと、歴史学を教えることを以て職業としている身としてはいささか不謹慎な思いをもった。

注

- 1 清田善樹「韓国の国史科教科書に見る日本史(1)」(聖徳学園岐阜教育大学紀要第15集)1988年3月,「同(2)」(同紀要第17集)1989年2月,「同(3)」(同紀要第19集)1990年3月,「韓国の歴史教科書に見る近代日本像(1)」(聖徳学園岐阜教育大学紀要第27集)1994年2月,「同(2)」(同紀要第28集)1994年9月
- 2 今回は、特に日本に関する意識を考察することはしないで、歴史意識の形成にいかに関わっているかと言うことを考察することに的を絞った。
- 3 執筆陣は、産業安全公団、外交安保研究院、国防大学院、精神文化研究院、韓国教育開発院に所属する人たちと高等学校の教員達である。
- 4 韓国の教育課程は、日本の学習指導要領に当たる。
- 5 ただし、「男子用」では、北朝鮮が非武装地帯の下に設けた「(南侵)トンネル」「北韓(北朝鮮)の好戦的芸術」「全人民の武装化をおこなっている共産軍」といったキャプションのついた写真が挿図に用いられている。男子用と言うことでより強く反共教育をはかっているのか、出版年度の違いによるものかは不明である。
- 6 第Ⅰ章第二節の小見出し。
- 7 日本との関係については、豊臣秀吉の朝鮮出兵、近代以降の植民地化の過程とそれに対する様々な抵抗があつかわれている。このような日本との具体的な事件を取り上げたものは、小稿のような歴史意識の形成を中心に考察しようとするものとはなじまないの、今回の考察の対象から除外した。
- 8 『増補 セ国史事典』(李弘植編集, 教学社発行 1991年)
- 9 『高等学校 国史(上)』(国史編纂委員会編纂, 1996年)16ページ欄外注。
- 10 『朝鮮語小辞典 私のソウル遊学記』韓国に留学している在日韓国人が、日本で育ち日本人的発想をするようになっていたため、つい日本人的な情緒的な言辞を弄したために、韓国人のボーイフレンドから陰陽の原理から説き起こすきわめて論理的な厳しい反論を喫したことがおもしろくかかっている。
日本人や韓国人がそれぞれいわゆる民族性という民族に特有の言動をしたり発想することに異論はないが、それは歴史的に形成されてきたものであって、今後変化しないと言う補償はないだろう。民族性というものは、固定的なものではないと思う。その点においては、教練の教科書が言う民族性には違和感を感じる。
- 11 『少年少女のためのわかりやすい韓国民族の歴史』(金忠一編訳, ソウル書林, 1984年)同書は小学校用教科書そのものではないが、韓国の小学校用の国史教科書を編集し日本語に翻訳したものである。
- 12 注8所掲国史事典による。
- 13 朝鮮の政界では、党争と呼ぶ政権争いが熾烈におこなわれた。そのため、多くの有能な人材がその犠牲となって命を失った。「清白吏」と呼ばれる清廉潔白な官吏どころか、「貪官汚吏」の目に余る不正が度々の農民の反乱を引き起こし、ついには東学農民戦争を引き起こしたことは、誰もがよく知っていることである。教練教科書の記述と史実との齟齬はきわめて大きく、ここにいたって建て前だけの歴史記

教練と歴史教育

述は破綻したように見える。

14 ベルンハイム『歴史とは何ぞや』（坂口昂 小野鉄二訳、岩波文庫）

15 伊藤亜人・大村益夫・梶村秀樹・武田幸夫監修『朝鮮を知る事典』（平凡社、1986年）

（追記）本校脱稿後、岐阜韓国韓国教育院の金泰完院長に会う機会があった。金院長によれば、教練の教科書が男子用とそうでないものの二種類あるのは、前者は男子校用で後者は男女共学校用であろうということである。また、今では高等学校における教練の位置付けは軽くなってきており早晩廃止されるだろう、現在では応急手当の仕方、キャンプの仕方などを習うだけであるという。